

のつながりを重視した教育プログラムの構築、現状の問題点の抽出とその対応を協議した。翌2010年は日本専門医制評価・認定機構の池田康夫理事長をお招きして、専門医制度の現状と将来展望について協議した。2011年はLondon大学のDr. GoodsmanとDr. Weinmanを招聘し、Teaching for medicineと題してコーチングやナラティブを学生指導や教員のFDに生かす手法を討論。2012年からは、千葉大学の田邊政裕先生

をお招きしてアウトカム基盤型教育（OBE）による教育プログラム立案を検討し、2013年はさらにこれを発展させて約40年に渡って本邦に浸透しているプロセス重視型の教育プログラムとOBEの比較検討を行う計画である。

副委員長：平出敦，委員：奈良信雄，伊野美幸，守屋利佳，村岡亮

17. 教材開発・SP委員会

廣橋 一裕（委員長・大阪市立大学大学院医学研究科）

シミュレーション教育は、コミュニケーション、医療安全、臨床技能の取得など医療現場の理解と体験に欠かせないものになっている。

シミュレーション教育の理解と普及を図るために、教育資源であるシミュレーターを有効利用するにはいかにすべきか、有効利用の経験、スキルスラボ管理運営のノウハウ、関心を持たせる工夫等について検討する。シミュレーション教育を促進するには、「教育は教員が行うもの」との既存の概念を払拭し、屋根瓦式教育の導入が必須である。シミュレーション教育に興味を持たせる企画として、各大学の医学生が模擬患者や身体診察シミュレーター等の教育資源を利用して、Medical Simulation Olympic（シムリンピック）を開催する。また診療参加型実習を促進するため、シミュレーション教育に関する研究デザインを作成する。たとえば医療シミュレーションの活用による医学生への教育効果を定量化し、評価する。

SP参加による医学教育場面が飛躍的に増えて

おり、全国で約150のSPグループが活動し、総数は1000人を超えると報告されている。SP養成のさらなる普及のために、第16期委員会で作成されたカリキュラムに基づき、SP養成者に具体的実践例を報告してもらい、これらを「SP養成のtips集」として、日本医学教育学会のホームページに掲載し、多様な資源の共有化を目指す。コンテンツの蓄積を行った後、書籍としての刊行も考慮する。最終目標として、SP養成の基準を示すとともに、各施設がそれぞれの環境に適応したプログラムを、自由に選択し実施できるようにする。また各地域でSP交流会を開催し、SP養成の地域連携促進、経験や資源の共有化を図り、SP教育活動の発展をめざしたい。さらに養成者やファシリテーターの育成や評価の標準化を支援したい。

副委員長：藤崎和彦，委員：吉田素文，阿部恵子，石川和信，小松弘幸，首藤太一